

奇妙な遠眼鏡

夢野久作

青空文庫

ある所にアア、サア、リイという三人の兄弟がありました。

その中で三番目のリイは一番溫柔おとなしい児でしたが、ちいさい時に眼の病氣をして、片方の眼がつぶってしまいましたので、二人の兄さんはメツカチメツカチとイジメてばかりおりました。

リイは外へ遊びに行つても、ほかの子供にやっぱしメツカチメツカチと笑われますので、いつもひとりポツチであそんでいましたが、感心なことに、どんなに笑われてもちつとも憤おこつたことはありませんでした。

ある時、三人の兄弟はお父さんとお母さんに連れられて、山一つ向うの町のお祭りを見に行きましたが、その時お父さんが、

「今日は三人に一つずつオモチャを買つてやるから、何でもいいものを云つてみる」と云われました。

アアは、

「何でも狙えばきつとあたる鉄砲がいい」

と云いました。サアは、

「何でも切れる刀が欲しい」

と云いました。又リイは、

「どこでも見える遠眼鏡とおめがねが欲しい」

と云いました。

これを聞いたお父さんとお母さんはお笑いになって、

「お前達の云うものはみんな六ヶむすかしくてダメだ。それにアアのもサアのも、鉄砲だの刀だの、あぶないものばかりだ。そんなものを欲しがるものじゃない。リイを見ろ。一番ちいさいけれども溫柔おとなしいから、欲しがるものでもちつともあぶなくない。みんなリイの真似をしろ」

と、兄さん二人が叱られてしまいました。そうして何も買ってもらえずに、只お祭りを見たばかりでお家うちへ連れて帰られました。

アアとサアと二人の兄さんは大層口惜くやしがって、今夜リイをウンとイジめてやろうと相談をしましたが、リイはチャンときいて知っておりました。

その晩、兄弟三人は揃って、

「お父さんお母さん、お先へ……」

と云つて離れた室へやに寝ますと、間もなくアアとサアは起き上つて、リイをつかまえて窓から外へ引ひきずり出して、そのまま窓をしめて寝てしまいましたが、リイは前から知っていましたから、声も出さずに兄さん達のする通りになっていました。

リイはそのまま窓の外の草原くさはらに立つて、涙をポロポロこぼしながら東の方を見ていますと、向うの草山の方が明るくなつて、黄色い大きなお月様がのぼつて来ました。

リイはこんな大きなお月様を見たのは生れて初めてでしたから、ビックリして泣きやんで見ておきますと、不意にうしろの方からシャガレた声で、

「リイやリイや」

と云う声がありました。

リイはお月様を見ているところに不意にうしろから名前を呼ばれましたので、ビックリしてふり向きますと、そこには黒い三角の長い頭巾かぶを冠り、同じように三角の長い外套がいとうを着た、顔色の青い、眼の玉の赤い、白髪のお婆さんが立っております。

そのお婆さんはニコニコ笑いながら、外套の下から小さな黒い棒を出してリイに渡しました。そうしてリイの耳にシャガレた低い声でこういいました。

「リイ、リイ、リイ

片目のリイ

この眼がね、眼にあてて

息つめて、アムと云え

すぎなとこ、見られるぞ

リイ、リイ、リイ

片目のリイ

このめがね、眼に当てて

すぎなとこ、のぞいたら

息つめて、マムと云え

どこへでも、ゆかれるぞ

アム、マム、ムニヤムニヤ」

と云うかと思うと、暗い家の蔭に這入ってそのまま消え失せてしまいました。

リイはビツクリして立っておりましたが、やっと気がついて見ると、自分の手には一本の黒い棒をしっかりと握っております。

リイはいよいよ不思議に思いました。急いでその棒をお婆さんに返そうと思つて、たつた今お婆さんが消えて行つた暗いところへ行きますと、そこは平たい壁ばかりで、お婆さんはどこへ行つたかわかりませんでした。

リイはどうしようかと思いましたが、それと一所に今のお婆さんが云つたことを思い出しまして、ためしに黒い棒を片つ方の眼に当てて、向うの山の上のお月様をのぞいて、教わつた通り、

「アム」

と云つて見ました。

リイはあんまり不思議なのに驚いて、棒を取り落そうとした位でした。

お月様の世界がリイの眼の前に見えたのです。

見渡す限り真白い雪のような土の上に、水晶のように透きとおつた山や翡翠のようにキレイな海や川がありまして、銀の草や木が生え、黄金の実が生つて、その美しさは眼も眩むほどもです。その中に高い高い大きな大きな金剛石の御殿が建つていて、その中にあのお伽ときばなし 噺の中にある竜宮の乙姫様のような美しいお嬢さんがこちらの方を見て手招きをしております。

リイは急に行つて見たくなりましたから、又教わつた通り呼吸を詰めて、

「ママ」

と言つて見ました。

リイが遠眼鏡をのぞいて、「ママ」と魔法の言葉を使いますと、向うに見えている月の世界のけしきがだんだん近寄つて来ました。

宝石のからだ身体に金銀の羽根を持った鳥や虫、または何とも云いようのない程美事な月の御殿の中の有り様あさまや、そこに大勢の獣けものや鳥を連れて迎えに出て来た美しいお姫様の姿などが、ズンズン眼の前に近づいて来ました。

変だと思つて遠眼鏡を眼から離しますと、これはどうでしょう。

リイはいつの間にか月の世界の真白な砂の上に立つておりまして、今までいた人間の世界は、向うに見える水晶の山の上にお盆のようにちいさくなって、紫色に美しく光つていきます。

あんまり不思議なことばかり続くので、リイは肝を潰して立っていますと、そこへ最前の美しいお姫様が来まして、

「まあリイさま、よく入らつしやいました。最前からお待ちしておりました。私はこの月

の世界の主人で月姫というもので御座います。どうぞゆっくり遊んで行って下さいまし」と云ううちに、リイの手を取って月姫は御殿の中に連れて行って、いろんな御馳走をリイの前に並べました。

けれどもリイはその御馳走をたべようとはしませんでした。お父様やお母様や兄様たちにだまっておうちを出て月の世界に来たのですから、リイは心配で心配でたまらなくなりました。そうして又もや遠眼鏡を眼に当て、向うの水晶の山の上に見える人間の世界をのぞいて、息をつめて、

「アム」

と云いました。

そうすると又不思議です。

一番初めに見えたのは、自分のうちに一番兄さんのアアと二番目の兄さんのサアが寝ている枕元に最前の魔法使いのお婆さんがあらわれて、アアには何にでもあたる鉄砲をやり、サアには何でも斬れる刀をやっているところです。

二人の兄さんは望み通りのものを貰ったので、すぐ起き上って外へ飛び出して、王様のお城に行きまして、王様に家来にしてくれと頼みました。

王様は、二人の持つている不思議な宝物ほうもつを見てたいそう感心をして、すぐに家来にしましたが、間もなく隣の国と戦争がはじまりますと、アアとサアは一番に飛び出して、アアは山の向うにいる敵の大将をたつた一発で打ち倒しました。そのあとからサアが刀を抜いて、攻めて来る敵を片っぱしから刀も鎧よろいも一打ひとつうちに切つて切つて切りまくりましたので、敵は大敗まけに敗まけて逃げてしまいました。

その御褒美で、アアは王様の国を半分と一番目のお姫様を、サアはまた残りの半分と二番目のお姫様を貰つて、二人共王様になり、お父様とお母様を半月宛ずつ両方へ呼んで、大威張りをしているところまで見えました。

リイはあんまり早くいろんなことがはじまつて行くので眼がまわるように思いましたが、それでもこの様子を見て安心をしまして遠眼鏡を眼から離しますと、最前から傍かたわらで見っていた月姫はニツコリしながら、

「人間の世界を御覧になりましたか」

と尋ねました。リイはだまつてうなずきまずと、月姫様はやはり笑いながら、

「あんまりいろんな事が早くかわつて行くのでビックリなさったでしょう」

「ハイ。夜が明けたかと思うともう日が暮れます。そうして暗くなったと思うともう夜が

明けています。あれはどうしたわけでしょう」

とリイは眼をまん丸にして尋ねました。

「それはこういうわけで御座います」

と月姫様は云いました。

「月の世界の一日は人間の世界の五万日になるのです。ですから、人間の世界の出来事を月の世界から見ると大変に早く見えるのです。もうあなたがその眼鏡を眼にお当てになつてから、今までに三年ばかり経たっているのですよ」

「エツ、三年にも……」

とリイはビツクリしました。しかしもうお父様やお母様も自分のことを忘れておいでになるだろう。そうして二人の兄さんたちに孝行をされて喜んでおいでになるだろうと思いましたが、いよいよ本当に安心をしました。

そうして月の御殿に這入って、月姫と並んで腰をかけて、並んだ御馳走を食べましたが、そのおいしかったこと。それから鳥の歌、虫の音楽、獣けものの踊りなぞを見ましたが、そのおもしろかったこと……ほんとに月の世界はいいところだとリイは思いました。

そのうちにリイは又家うちのことを思い出しました。

自分はこんなに面白く遊んでいるが、うちの人はどうしているだろうと思いつながら、眼鏡を眼に当ててみますと……大変なことが見えました。

リイが人間の世界を遠眼鏡でのぞいた時は、もうこの前見た時から三十年も経っておいりましたので、リイのお父さんやお母さんも、それからアアとサアのお妃きさきの父親の王様も死んでしまつて、アアもサアも立派な鬚を生はやした王様になっておいりました。

一番兄さんのアア王は今一本の手紙を書いて、弟のサア王の国へお使いに持たせてやつておいります。

その手紙にはこんなことが書いてありました。

「おれとお前とはこの国を半分宛ずつ持つている。しかしおれはお前の兄さんだから、お前はおれの家来になつて、お前の国をおれによこしてもいいと思う。そうすればお前はおれの一番いい家来にしてやる。けれどももしお前がイヤだと云うのなら、おれは何にでもあたる鉄砲を持つているから、ここからお前を狙つて打ち殺してしまふぞ」

この手紙を見た弟のサアは大層怒おこりました。

「いくら兄さんでも、半分宛ずつわけて貰つたこの国を取り上げるようなことを云うのは乱暴だ。そんな兄さんの云うことは聴かなくてもよい。鉄の鎧を着ていればいくら鉄砲だつて

「こわいことはない。今から兄さんと戦争をしてやろう」

と、すぐに家来に戦の用意をさせました。

このことをきいた兄さんのアア王は大層憤りまして、

「おのれ、サア王の憎い奴め。兄貴の云うことをきかないで戦争の用意をするなんて憎い奴だ。それならこつちから戦争をしかけて滅茶滅茶負かしてやれ」

と云うので、すぐに兵隊を呼び集めました。

アア王とサア王の妃はもともと姉さんと妹ですから、大変心配をしまして、いろいろに二人の王様の戦争の用意を止めようとはしましたが、二人ともなかなか云うことをききません。

二人のお妃は只泣くよりほかはありませんでした。

この有様を月の世界から見たリイは、月姫にこう云いました。

「私はこの戦争を止めに行かなければなりません。そうして二人の兄さんが生涯戦争をしないようにしなければなりません」

月姫はこれをきいて、

「ほんとに早く止めて上げて下さいまし。二人のお姉様がお可哀想です。けれども、どう

してこんな大戦争をお止めになるのですか」

と眼をまん丸にして尋ねました。

リイはニツコリ笑いながら、

「まあ見ていて御覧なさい」

と云ううちに又も遠眼鏡を眼に当てました。

リイは遠眼鏡を眼に当てながら、一番兄さんの宝^{ほうもつ}物の鉄砲はどこにあるかと思ひながら、

「アム」

と云いますと、すぐに兄さんのアア王のお城の宝^{たからぐら}庫が見えました。

その宝^{たからぐら}庫には強そうな兵隊がチャンと番をしておりまして、その庫^{くら}の奥にある大きな鉄の宝箱の中に立派な鉄砲が一挺ちゃんと立てかけてありました。

リイはそれを見つけると喜んですぐに、

「ママ」

と云いますと、もうその宝^{たからぐら}庫の中の宝箱の中の鉄砲のところへ来てしまいましたから、リイはその鉄砲を肩にかつぎました。

それから今度は次の兄さんのサア王のお城の方を向いて、宝物の刀はどこにあるだろうと遠眼鏡をのぞきながら、

「アム」

と云いますと、やっぱりそのお城の宝庫たからぐらの中の宝箱の中にチャンと蔵しまってありましたから、すぐに、

「マム」

と云うと、そこへ飛んで行ってその刀の紐を腰に結びつけました。

リイはそれからアア王とサア王の国の境さかいめ目にある一番高い山の上に遠眼鏡の魔法で飛んで行って、その岩に腰をかけて、遠眼鏡で二人の兄さんのお城のようすを見ていました。

二人の兄さんはそんなことは知りません。両方とも有りたけの兵隊をみんな集めて戦いくさの用意をしてしまいますと、家来を呼んで、

「あの宝の鉄砲を持って来い」

「あの宝の刀を持って来い」

と云いつけました。

両方の家来は宝庫たからぐらの中の宝の箱を開いて見ますと、どちらも宝物が無くなつていますので、肝を潰して、

「お宝物の鉄砲が無くなつております」

「お宝物の刀が無くなつております」

と青くなつて両方の王様に言いました。

両方の王様も青くなつてしまいました。それは大変と、てんでに宝庫に駈け付けて調べて見ますと、番兵も庫くらの鍵もチャンとしていながら、中の刀と鉄砲だけ無くなつています。そうしてもとの鉄砲と刀とあつたところに、どちらにも、

「お宝物はリイがいただいでまいりました。リイは国の境さかいめ目の高い山の上にお待ちしております」

と書いた紙片が置いてありました。

両方の兄さんたちは憤おこるまいことか、

「さては弟のリイは泥棒の名人になつたと見える。あの高い山を取り巻いて、リイを引つ捕えて宝物を取りもどせ」

と云うので、両方の国の兵隊が両方からその山をぐるりと取り巻いて、ズンズン攻めの

ぼって来ました。

ところがその山の絶頂まで攻めのぼって来るうちにすっかり日が暮れてしまいましたので、二人の兄さんは両方ともリイが逃げはしまいかと心配していましたが、間もなく東の方からまん丸いお月様がのぼって来ましたので、その月の光りでやっとわかった山道をズンズン登って山の絶頂に來ますと、そこにある高い岩の上に不思議にも昔のままの子供の姿のリイが刀と鉄砲を持って立っておりました。

兄さんのアア王と弟のサア王はこれを見ると、

「それ、あいつを弓で射ち殺せ」

「刀でたたき殺せ」

と云いましたので、両方の兵隊は一時に岩の下へ突貫して來ました。

リイは攻め寄せる兵隊を見てニコニコ笑いました。右手に刀、左手に鉄砲をさし上げて、「みんな音なしくしろ。音なしくしないとこの鉄砲と刀で一人も残らず殺してしまうぞ」と云いました。

これを見ると、今までワイワイと勢いきおいよく攻めのぼって來た兵隊は、皆一時にドンドン逃げ出してしまって、あとにはただ二人のお兄さん、アア王とサア王とだけが残りしました。

リイは二人の兄さんに向つて岩の上からこう云いました。

「お二人のお兄さま、おききなさい。あなたがたはなぜそんなに喧嘩をなさるのですか」
二人のお兄さんはこれをきくと恥かしくなつて、岩の下で顔を見合わせて真赤になりました。

リイは又こう云いました。

「お二人がえらくおなりになつたのは、この鉄砲と刀のおかげです。けれども又こんなに喧嘩をなさるのも、この鉄砲と刀があるからです。お二人が仲よくさえなされば、この鉄砲も刀もいらぬ物ですから私がいたでいてまいります」

と云ううちに、東の方に向つて遠眼鏡でお月様をのぞきながら、

「アム」

「マム」

と一時に云いました。

そうすると、見るみるうちにリイの足は岩の上から離れて、刀と鉄砲を荷^{かつ}いだまま月の世界の方へ飛んでゆきました。

月の世界では月姫がリイを待つておりまして、

「よくお帰りになりました」

とお迎えに出て来ましたが、見るとリイの眼はいつの間にか両方とも開いておりましたので、月姫は又ビツクリして、

「まあ。あなたの眼が両方とも開いていますよ」

と云いました。リイもこれを聞くとやつと気がつきまして、

「ヤア。ホントに。これは不思議だ。これは大かた今まで自分ひとりで遊んでいたのに、今度はお兄さんたちの仲直りをさせたので、神様がごほうびに開いて下すったのでしよう」
「ほんとにそうでございましょう。おめでとう御座います。さあお祝いにみんなで遊びましょう」

と大喜びで遊びはじめました。

山の上の岩の根本に残った二人の兄さんは、リイが天に飛び上って、お月様の方に行つてしまったのでビツクリして抱き合いました。そうしてこんな事を約束しました。

「リイは神様になった。そうして月の世界からいつも私たちのすることを見ているに違いない。そうして私たちがわるいことをしたら、すぐにあの鉄砲で撃つたり、あの刀で斬つたりするに違いない。だからこれから仲よくしよう」

二人はそれから別々にお城へ帰りますと、ほんとうに仲よく暮らしました。
みなさんがわるいことをなすつた時も、リイはあの月の世界から遠眼鏡で見ているかも
知れません。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※この作品は初出時に署名「香俱土三鳥《かぐつちみどり》」で発表されたことが解題に記載されています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年4月4日公開

2003年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奇妙な遠眼鏡

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>